

# 「帝木の並び」の主題性をめぐって

——源氏物語の主題性進展についての研究序説——

森 一 郎

一

源氏物語は単一の構想、主題によつて貫かれてゐる長篇物語ではなく、その長篇としての構成には或る主題的なまとまりをもつた小物語を積み重ねていく方法がとられてゐる。

——けだし、それは長篇構成としては模索的過渡的段階、短篇から長篇へ物語が成長発達していく形成過程を示すものだ。

因みに、物語文学が長篇としての一定の構成的意図をもつて

執筆され、単一の構想、主題によつて貫かれた長篇物語にまで成長するのは狭衣物語に於てである。<sup>(註1)</sup>源氏物語は宇治十帖に至つて相当に長篇としての成熟に達してゐるけれども、接穂式と呼ばれる構成が示すように、テーマの熟するにつれて書きつがれる作風を最後まで残してゐるのである。——その小物語のそれ／＼は、一卷だけのものもあり、二巻、三巻、あるいは「玉鬘の並び」のように十巻が一つのまとまり

をもつ中篇的なものもある。作者はこのある主題的なまとまりをもつた小物語を書いては発表し、発表しては書くという風にして書きついでいつたように思われる。従つて源氏物語を読む場合、この小物語に分けていけば一つの單元として考察し、その展開をたどつて作者の創作意識の進展を考究することは十分理由があるわけで、近來、源氏物語という長篇物語を第一部（桐壺——夢浮橋）、第二部（若菜——幻）、第三部（匂宮——夢浮橋）に分けて考えることが十分な理由をもつて認められているように、この小物語に分けて考えることも認められてよいと思うものである。

さて、それではどのようにしてこの小物語を分けるのかとすることがまず問題になるし、次にはその展開はどのようにされたかということが問題になるが、分け方としては、見方によつて多少の相違が出てくるが、「一つの主題的なまとまり」という内容上からのとらえ方を認めてよいと思う。武田宗俊氏は巻々の頭尾に就いて、巻頭を修飾型と即事型とに分け、巻尾を間接話法的終結と直接話法的終結とに分け、間接話法的終結の巻尾は小物語（武田氏は「群」と呼んでおられる）の終結となるところであり、小物語の起筆には即事型修飾型の両方があるが、修飾型の巻頭は必ず小物語の起筆である、とされた。<sup>(註2)</sup>そして氏の成立過程説にもとづいて源氏物語の発表事情を推定しようとしたのであつた。次に展開の過程についてはこの物語の成立過程についての考え方によつて

見方に相違が出てくる。又、時間的な執筆順序よりも、作者の意識裡にアイディアがはらまれた時点を問題とし、その着想の展開という創作心理を追究し、主題の発展を論じようとした高橋和夫氏の「源氏物語における創作意識の進展について」（『国語と国文学』昭和二十八年九月号）という論文のような態度に立つて「説話」に分けて考察するものもある。

源氏物語の主題性の進展を考察する際に、このような小物語のそれ々の主題性を考察しつゝ、源氏物語という長篇の主題性の進展をたどつていくことは源氏物語の構成に即した主題性の追究となるであらうし、今後はかゝる視点がとられるべきだと思ふのであるが、先述した両氏の論文にはその態度をうかゞうことができた。私の態度もこゝにあり、本稿の根拠もそこにある。

## 二

さて、源氏物語第一部において特にこの小物語の独立性が強く、時間的並列の感が強いのは、作者が長篇として仕立てる意図を恐らく第一部の終り頃になつて持つに至つたからであらう。即ち第一部は長篇としての構成について作者は十分配慮し得なかつた事情をもつのである。「最初は短篇として発表され、それが読者の要望によつて続編が書きつがれ、更にその続編が書かれ、あるいはさかのぼつて前編が書かれ、次第に作者も全体を長篇として仕立てようとするに至つたの

だ」と玉上琢彌先生が説かれた事情を第一部の構造は特徴的に有して、いるのである。

この小物語の独立性が強いという点で最も際立つているのが帚木の並び、次いで玉鬘の並びであらうか。玉鬘の並びについてはしばらくおくことにして、こゝでは帚木の並びが或る主題的なまとまりをもつた一つの小物語として最も際立つていることに注目し考えたい。

小物語としての独立性を強く感じさせるのは、このグループのはじめの巻である「帚木」冒頭の文がこのグループの終りの巻である「夕顔」の結文ではつきり受けられていることによる。

光源氏、名のみこと、しう、言ひ消たれたまふとが多くなるに、いとど、かかるすきごとどもを末の世にも聞き伝へて、かろびたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへ事をさへ、語り伝へむ、人のものいひさがなさよ。さるは、いといたく世をはゞかり、まめだちたまひけるほどに、なよびかにかしき事はなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし。(「帚木」冒頭の文)

かやうのくだくしき事は、あながちに隠ろへ忍びたまひしも、いとほしくて、皆漏らしとゞめたるを、など、御門の御子ならむからに、見む人さへ、かたほならず、ものほめがちなる、と、作り事めきてとりなす人、ものしたまひ

ければなむ。あまり物言ひさがなき罪、さりとて無く。

(「夕顔」の結文)

右の帚木冒頭の文と夕顔の結文を読み合わせてみて、

かかるすきごとども(帚木) ── かやうのくだくしき事(夕顔)

忍びたまひける隠ろへ事(帚木) ── あながちに隠ろへ忍びたまひしも(夕顔)

という風に、同一事の内容としていられると思われる語句が照応して存在していることによつても帚木冒頭の文が夕顔結文でうけられていることは端的な明証を持つのであるが、帚木、空蟬、夕顔の三巻が一連の構想を持つてひとまとまりをなしていることは、既に広道の評釈などが説いていたのであつて、在来並びの巻と称せられたことを思いあわし、もはやほとんど異論のないところである。

この際立つたまとまり方は、この三巻の内容と関聯して色々の事を考えさせるが、まず第一に、帚木冒頭起筆の表現内容及び夕顔結文の表現内容から、作者が自己を乗り出して自作について大仰なほどの言辞を弄して、実に力をこめた態度がうかがわれることを考え、これは「源氏物語が最初短篇として発表された」その最初の短篇だつたのではないかと想像せしめられる。「光る源氏、名のみこととしう……交野の少将には笑はれたまひけむかし。」と主人公に重厚な照明を当てる起筆、主人公紹介の起筆がその感を深くさせる。

源氏物語の主題性進展についての研究として小物語に分けて考察を進めるべくこゝにまず「帚木の並び」の主題性を論じようとする根拠は上来の叙述にほゞ明らかなことと思ふ。

### 三

帚木の並びの主題性を考察するにあつて、この「帚木の並び」の物語の事件、人物が、中の品の階級の女性を描いたものであることに特に注意したい。中の品の女性が物語の主人公として物語を統一づけていることは源氏物語全篇に於て特殊といつてよいのではないか。帚木冒頭の語り出しの文は作者のこの帚木の並び執筆の創作意識を示すものとして注目されるが、「いとゞかかるすきごとどもを末の世にも聞き伝へて、かろびたる名をや、流さむ、と、忍びたまひける隠るへ事をさへ、語り伝へけむ、人のもの言ひさがなさまよ」はいかにもことごとくしい大仰な物の言い方である。何故このようにことごとくしく大仰な物の言い方ことわり方をしているのであろうか。「かろびたる名をや流さむ」と忍び隠すのは広道の評釈が考えている通り、帝の御子として受領程度の賤しい身分の女を相手としたからに外ならず、「かろびたる」とか「忍ぶ」、「隠す」という言葉は身分差の甚だしい恋愛事件で、人に知られてはまずい隠し事であることを示すものと考えられるのであり、このような事柄を語ることにいつてのはゞかりが、物語の語り出しに於てことごとくしく物言ひ、こと

わりとなつてあらわれているのではなからうか。しかも作者は「人のもの言ひさがなさまよ」（おしやべりの罪の深さ）とはゞかりことわるだけでは気がすまず、「さるは、いといたく世をはゞかり、まめだちたまひけるほどに、なよびかにかしき事はなくて」と、まるで自ら述べたことをすぐにうち消し否定してしまうような口ぶりで遠慮しはゞかるのであつた。

このように遠慮しはゞかる物語、光源氏という最上層貴族が中、下層の女性と交渉する物語を三巻にわたつて書きつゞけた作者の執筆意識には表向き遠慮しはゞかりつゝ、その実はひそかなる自作への自負は先行物語への批判を秘めた表現にうかゞわれるところで、「交野の少将には笑はれたまひけむかし」——交野の少将物語ほど風流一途の物語ではなくて、社会に気がねしていてあまり面白くありません——と、謙遜し卑下しつゝそれは同時に「交野少将物語とは違つた物語なのだ」という自負、即ちこの物語の主人公光源氏の人物像を交野少将とは違つたものである、交野少将のように物語のために抽象化された人ではなく社会人としての深みをもつた人であると、「いといたく世をはゞかり、まめだちたまひけるほどに、なよびかにかしきことはなくて」という表現にその自負をひめたのである。すぐ後に見られる「しのぶのみだれや」「あだめき目馴れたるうちつけのすきすきしなど」が伊勢物語初段を指すと考えられ、そのようなことを「好ましからぬ御本性」だとしているのも伊勢物語初段を念頭にし

た批難と自作への自負を示すものと見られるのである。(註5)

さてそこで、「かやうのくたくしき事」(夕顔結文)と弁解せずにはおれなかつたほどの、さびしくあばれた下層社会を舞台にした下級貴族の女性(夕顔は実際は三位の中將の姫君であるが、あやしき垣根の下層社会に住んでいたら下の下の女として対されたわけである。実質的には中の品である)との恋愛事件、そしてそれは女(夕顔)を死なせてしまふ悲惨な終末をたどるのであり、又国司の後妻である中流貴族の女(空蟬)とは恋が遂げられなかつた、まことに「なよびかにをかしき事はなき」恋愛事件の物語、「くたくしき事」と卑下する中、下層の女の物語を三巻にわたつて書き通した意義こそ問題でなければならず、それは必然この帚木の並びの主題性の問題に外ならない。

#### 四

中の品の女を物語の世界に導き、光源氏と交渉せしめるために作者ははじめから一貫して構想をめぐらしている。雨夜の品定めをもつて物語ははじまるが、雨夜の品定めの設定は光源氏をして中の品の女性と交渉せしめるための用意であり、構想的意義をそこに見出し得ることは既に異論のないところである。雨夜の品定めには於ける左馬頭の中流重視論(頭中將も左馬頭からのうけうりらしいが中流重視を説く)、源氏や中將を前に中の品の女の好きを語る論は、後の、源氏の

空蟬や夕顔との交渉を導くものとなつてゐることは誰しも気づくことである。

雨夜の品定めは梅雨のころのある夕方に場面をとり、源氏の君の側に頭中將がひかえた睦じい二人の生活の點景から、やがて頭中將の「女性に難のうちどころのないすぐれたものはなかなかいない」という嘆きにはじまり、最後に中の品に好ましき女のいる可能性を言つてゐる。

中の品になむ、人の心々おのがじゝのたてたるおもむきも見えて、わかるべき事かたがた多かるべき。

中の品の女性には個性があつて好ましいとする「中の品重視論」は左馬頭から聞いたうけうりらしいことが後の段でわかるが、作者は雨夜の品定めのお端にはやくも中の品の女性重視の論を登場人物(頭中將)をして語らしめてゐるのであつて、中の品の女をクローズアップさせてゐこうとする作者の意向ははやくもほのめいてゐるのである。そして次の段、登場した左馬頭の論はその度合を大きく深めて中流重視を説いてゐる。

受領といひて人の国の事にかゝらひ管みて、品定まりたる中にも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、えりいでつべきころほひなり。

と言ふのである。

このように中の品重視を強調するのは中の品の女を物語の世界に導く構想的布石であるこというまでもないが、この帚

木の並びがかくのごとき構想的布石を要しつゝ中の品の女性を女主人公として描いていることの意義をこの左馬頭の中流重視論を手がかりに考えたいと思う。

この左馬頭の受領重視論は当時の社会的風潮を背景とするものであつた。清少納言の枕冊子の「したり顔なるもの」に「除目にその年の一の国えたる人、よろこびなどいひて、いとかしこうなりたまへりなど人のいふいらへに、何かいとことやうにほろびてはべるなればなどいふもしたり顔なり」又、「ありありて受領になりたる人の気色こそうれしげなれ。あづかあるすんざのなめげにあなづるも、ねたしと思ひきこえながら、いかゞせんとてねんじ過しつるに、我にもまさるものどもの、かしまり、たゞ仰せうけたまはらんとつゝあせうするさまはありし人とやは見えたる。女房うちつかひ、見えざりしてうどさうぞくのわきいづる。」「受領の北の方にてくだることよろしき人のさいはひには思ひてあんめれ」などの記事が見え、受領国司になることが富裕な生活を約束し、当時の人々がこれを羨望している有様を伝えている。反対に、国司（受領）を希望しながら、なれなかつた人はまことに気の毒なものである様子を「すさまじきもの」の中「除目にかさ得ぬ人の家」にあり／＼とべている。このように国司（受領）が羨望されたのは全く国司（受領）の所得が豊かなためで、京都においては貧乏に苦しんだ人もひとたび地方官として赴任すれば豊かになつたのである。古今著

聞集卷一神祇上総守時重千部経説誦功德事には、一条天皇の御代、上総守時重という人が、在京中は貧乏で、千部法華経説誦の所願を懐きながら、一人の僧をも頼むことが出来なかつたが、日吉社に祈願をこめた感応で、上総守に任ぜられたので、「任国の最前の得分」だけで、千部経説誦を始めることが出来たという記事がある。地方官の収入の豊かな事例である。国守は、中央官より格段に財をたくわえることができたのであつた。即ち中央官吏（京官内官）に見られない地方官（外官）の一大特典として公廩給の給与があり、守が六分、介は四分、掾は三分、目は二分、史生は一分であつたが、掾のことを三分、目のことを二分、史生のことを一分と呼ぶ異称が行われた程で国司はじめ地方官を収益利得の対象として考える傾向があつたのである。（註6）まことに財力がものを言う時代であつたのだ。

国司（受領）を志望し、その富裕を念願する時勢相は、源氏物語の中にも描かれている。近衛中将の官をすてて播磨守に任ぜられた明石入道が、「この世の設けに、秋の田の実を刈り納め、残りのよはひ積むべき稲の倉町どもなど、折々、所につけたる見所ありて、し集めたり。」（明石巻）とあるごとく、国司としての職権を利用して富裕に暮らすことを志している様をえがいてゐる。

藤原氏の主流によつて中央政權を独占せられ、中央での榮達をはぐまれた貴族達が地方に出て国司として富裕に暮らす

ことを志した時勢相、上層貴族と中・下層貴族の分化のはげしい時勢の動きの中にあつて、その時勢の矛盾のはげしさきびしさを最も痛切にしわよせられたであろう中の品の貴族達にとつて、それはいかばかり切実な生きる道であつたことであらう。当代読者はそれを痛切に生きていた。そして中の品なる源語作者自身そうであつたのだ。作者の父為時が越前の国司をのぞんで申文を奉つた話は余りにも有名で切実な狐官運動の姿として胸をうづつものがある。読者と作者とが共感する現実的共通基盤に支えられて源氏物語は書かれていのである。男と女の世界を描く物語の世界がかゝる現実的基盤をその背面に持つたことは、源氏物語の世界が現実への関心に根ざすものであることを示すものだと思う。そしてそれは読者に対しておとぎばなし的興味からはるかにすゝんだ、自分達の生活にとつて直接的な関心と興味を持たしめるものであつたと思われる。因みに、物語の読者として、上層貴族の姫君を真の読者とされているのであるが、<sup>(註7)</sup>宮仕え女房達、即ち中層貴族のインテリ女性達を鑑賞力の高い読者として想定すべきと考える。中でもすぐれた女房、例えば紫式部、清少納言、赤染衛門等々は批評的見識すらもつた批評家とも称すべき高い読者ではなかつたか。更に紫式部日記の例の「若紫やさぶるふ」の記事によつて知られる通り源氏物語は公任など上層貴族の男子をも読者とするまでのものになつていたことを想起されたい。先に「読者と作者とが共感する現実的共通

基盤……」と言つた「共感する現実的共通基盤」ということは特には作者と同じ階級にぞくした女房達の読者層について言えるのではないかと想像するのである。特にこの帯木の並びが先に考えたように「源氏物語が最初短篇として発表された」その最初の短篇であり、それは宮仕え前に書かれたと仮定するならば、宮仕え以前の作者の周囲の人々——それは当然中の品である——を読者として予想し書かれたものと考えることができるのである。この帯木の並びがあまりにいちじるしく中の品の世界を筆にのせていることは宮仕え前であるからではないかと思われるし、それがこの帯木の並びの物語の世界を本質づけていることも十分考えられるのだ。読者としての道長や彰子その他最上層貴族の宮廷社会に住む人々を直接予想せずにおれた宮仕え以前、といつても、やがては自作の反響を道長ら権門の貴族から期待したではあろうけれども、当面の直接的な読者として自己の周囲の人々を意識しつつ書いたであろうこの帯木の並びの物語であればこそ、雨夜の品定めに於ける中流の妻えらびの論、「びさうなき家とうじ」「おのがじは塵もつかじと身をもてなす」娘の心づかいなど中の品の世界をあれほどの分量にわたつて書き続け得ているのではなからうか。更には空蟬物語、夕顔物語の世界にしてもそうだ。あのような愛情の心理描写の世界は、上の品の姫君よりも中の品の女達にとつて生活感情に直接的な興味となるものと見るべきではなからうか。このように考

えてくると、この帚木の並びの物語は「中の品の女による中の品の女のための中の品の女の物語」であるということになりはすまいか。それが宮仕え以後書きつがれて上の品の女のための物語の性格を帯びていつたと臆測されはしないであろうか。帚木の並びはその意味に於て源氏物語全篇の中で特殊な本質、主題性をもつた巻々ではなかつたらうか。

こうした成立の問題を念頭におきつゝ、しかし一方、それが臆測であり推定であり確証のないことであることを考慮し必ずしもそれにかゝらず、考えていきたいと思ふのであるが、いづれにせよ、こゝでは、この帚木の並びの世界が中の品の女をえがいていることの特質性に注目しておきたいと思ふのである。——成立の問題に少し立ち入つたのもこのことを強く認めたかつたからに外ならない。

中の品は、当時藤原北家主流の極まりない繁榮と反比例して、それ以外の貴族達が次第におちぶれていつた時勢相のうちに層を成しきたつたもののように、雨夜の品定めで左馬頭の判定によると、もとは身分が高かつたが落ちぶれたもの、或はもとは普通の身分であつたが成り上つたという貴族達であつた。即ち源氏が頭中將に質問する言葉に「その品々やいかに。いづれを三つの品におきてか分くべき。」<sup>(4)</sup>本の品高く生

まれながら、身は沈み、位みじかくて人げなき、又なほ人の上達部などまでなりのほりたる、われは顔にて家のうちを飾り、人に劣らじと思へる、そのけじめをばいかに分くべき」

とあるが、登場した左馬頭がその答に、前記傍線部の(4)(5)の両者をそれ／＼中の品だと判定して、「なりのほれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世の人の思へることも、さはいへどなほ異なり。又もとはやむごとなき筋なれど、世にふるたづき少なく、時世うつろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、わるびたる事どもいでくるわざなめれば、とり／＼にことわりて、中の品にぞおくべき」といつている言葉にそれをうかゞうことができる。このような貴族社会の矛盾をになわせられた中流階級の女性として、そこに懐胎される悩みを追求する姿勢をとつて、そうした中の品の女の運命と生活について追求した心の記録として高い意義をもつ蜻蛉日記の精神をうけつぎ——そのおもむきは異にするが——より多角的な世界の形象化として物語という構造の中にその追求を行つたのである。空蟬や夕顔の造型の意義はそこにあり、女が最も女たり得て、その生活と運命をあらわにするのは男との交渉に於てであるが故に、空蟬や夕顔等の女性像を、光源氏と交渉せしめ、その姿を浮彫していく方法が必然的にとられたのだと言えよう。

## 五

さて、この空蟬や夕顔の中の品の女の生活と運命をどのよう追求しているかに主題性がはらまれるわけであるが、空蟬物語や夕顔物語の序としての雨夜の品定めに彼女等（空蟬や夕顔）の属する階層である中の品について登場人物を通じ

て語つてゐることはとても効果的である。それは、やがて語られる源氏と女達との交渉に於ける女の心情を背面から浮彫するはたらしきをなしているのである。では中の品を作者はどのように語つたか。例の中流重視論を検討してみると、中の品は上の品の世界からはるかに低い身分のものとしてさげすまれいやしめられ卑下さるべきものとして作者は語つてゐる。「受領といひて」という風に、上の上なる光源氏や頭中将からはほど遠い圏外の間人を説明する言葉つきであり、「人の国」といつて都人意識に立つて地方を見下した言い方（自分達の国に対する他人の国という意識、近代で言えば本國(註9)に対する種民地）をして更に「かゝづらひ嘗みて」と言つて、広道の評釈が言うように「受領をいやしめたる書きさま」なのである。又、先に頭中将は中の品の女を個性があつて好ましいと言つたが、それは上流の女のように世話する多くの人にかくされて本人の個性の優劣が分らないのに比べて、個性が分つて面白いというわけなのであつた。中の品の女を個性が分つて面白いというのは正しい指摘であり作者の主張を感じるが、しかし頭中将の言説の趣旨は好ましき女性を求めゝ恋愛遍歴の相手として面白いということを見逃してはならない。左馬頭の語はそのおもむきが露骨であつて、「世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ雀の門に、思ひのほかに、らうたげならむ人のとぢられたらむこそ、限りなくめぐらしくは覚えぬ。いかではかゝりけむと、

思ふよりたがへる。事なむ、あやしく心とまるわざなンベキ」と中流あるいは下流に思ひのほかに可愛い、女を見出す、そのめぐらしき意外さをよいとじてゐるのである。めぐらしき、意外さを興ありとする気持は、当代貴族の獵色をあらわにしていて、現代の女性観からは大いに問題になるところであるわけだが、当時としても、対等の身分として女に対する態度でないところから来ていて、身分的にひどくおとしめられたものであることを示すものとして注意せねばならぬところだと思ふ。上の上なる女性こそ光源氏の眞の相手としてふさわしいのであること、——それは「この御ためには、上が上をえりいでも、なほあくまじく見えたまふ」という書き方などにも明瞭であらう。——中の品なる女性は、めずらしき意外さ、或は個性があらわであることのゆえをもつて、光源氏の恋愛遍歴の対象たり得ているにすぎないこと、価値基準から言えば、上、中、下の呼称が示す通り、上の品から見れば低いものとして、作者は語つてゐることを確認しておきたい。こうした叙述は、主人公光源氏が中の品などは相手にしない高貴な身分であることをはつきり感じさせるのである。さて、雨夜の品定めが終つて、空蟬物語へ進展するまでに、主人公光源氏の高貴な身分を示す一端を示し、又、女主人公（空蟬）の地位を紀伊守との対話の中に示して、両主人公の身分的なあたりをはつきりと浮彫してゐる叙述は特に注目しなければならぬ。これは空蟬物語のためのまことに

すぐれた準備である。中川の宿の源氏と女(空蟬)との逢瀬における、二人の、殊に女の心の動搖、心理の動きを、背面から浮彫し、読者にその女の心情の真実を切々と伝えるはたらしきをなしているのである。このような準備、先行描写によつて、主人公光源氏と女主人公空蟬とのきわだつた身分的なへだたりを知つた読者は、二人の逢瀬のすぐれたクライマックスの意味をあまりなくうけとめていたであらう。

逢瀬の場面、心の動搖のさなかで、「うつゝとも覺えずこそ。かすならぬ身ながらも、おぼしくたしける御心ばへのほども、いかゞ浅くは思うたまへざらむ。いとかやうなるきは、きはとこそはべるなれ」と身分の相違を女はうつたえている。又、「いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしなごらの身にて、かゝる御心ばへを見ましかば、あるまじきわれ頼みにて、見直したまふのちもやと思ひたまへ慰めましを、いとかう仮りなる浮寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへまどはるるなり。よし今は見きとなかけそ」と、受領の妻という低い身分にきまつてしまふまでの昔のまゝのからだで、このような御心ざしを受けるのであるならば、……しかしこのようなかりそめの浮寝の身の上を思い悲しく心が乱れるのだと言つている。身分の相違をうつたえ、はかないかりそめの逢瀬なるがゆえの思い乱れる悲しみをうつたえているのである。人妻なるがゆえにこばむ心持というよりは、女は低い身分なるがゆえにかりそめの逢瀬に終り真実には愛

してもらえない己が身の境涯の憂さを思つてこばむのである。中の品なるこの女の悲しみは、上の上なる源氏の心ざしをあこがれつゝこばむ矛盾背反の心のかつとうにあつたのである。女は上の品の世界にこれがつゝみじめに自らを傷めている。そのみじめさを自覚し踏み耐えて、不粹なやつと思われてもつれない態度で押し通そうと固く心に決めた心情にこの女のすぐれた見識があり、その踏み耐える中の品の女性像こそ、源語作者が現実の歴史的社会的矛盾に処した姿であつたのだ。

源氏も悲嘆しているのであるが、論じられてゐるような、源氏が破れた恋だというよりは、帚木巻の終りにある源氏と女の贈答歌

は、き木の心を知らでそのはらの道にあやなくまどひぬ  
源氏  
るかな  
女(空蟬)  
かすならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらずき

ゆるは、き木

に象徴的な高まりを見せてゐるように、*「実り得ない悲恋」*を現実の社会的矛盾としての中の品の女の命運、哀傷として描いたところに主題性があると思う。古今六帖に「園原や伏屋に生ふるは、き木のありとて行けどあはぬ君かな」とある長野県伊那郡園原の伝説をその源においたこの贈答歌の悲しい発想は、中川の宿の逢瀬の悲劇性の至調音を奏でるものだ。

ところで、この中川の宿の逢瀬の物語は、「なほ消えずちのぼ」る女の面影にひかれる源氏の思いを筆にとゞめつゝ、「……おぼさるとぞ」とひとまずしめくゝられる。同じ女（空蟬）の物語を何故こゝで切るのだろうか、と、この帚木巻の結びは問題とされているようであるが、この帚木の歌の心を象徴的な高まりとする一小話として完結させ、新たに熟した構想を巻を改めて次の空蟬巻の物語として語り起したのだと考へたい。

なお、この「……とぞ」は青表紙本にあつて河内本にはない。武田宗俊氏などは、帚木、空蟬、夕顔が一つの群と見られる点から、群の中途に間接話法がないのが正しいとして河内本の方を採つておられるようであるが、青表紙本に従つても、三巻ひとまとめと見ることがをさまざまで説明を加へることができない。即ち、青表紙本に従つて考へてみると、同じ女（空蟬）の物語を中途で切るために、切れ目をはつきりとさせる心持が強くはたらないで、「……とぞ」と結んで終結の意図をはつきりと示したのではないかと思う。空蟬巻の終結では青表紙本は歌で終つていて終結の感がうすいけれども、これは次の女（夕顔）の物語が展開されてその区別にまぎらわしいところがないためにしめくゝる気持を強くはたらかせなかつたのであらうと思う。河内本は空蟬巻の終結を、歌につゞけて「とてやみにけり」としているが、青表紙本の本文が歌で終つているのが巻の終結として余りにあつけない

感じがするので補つたのではないかと思う。帚木巻の終りも「とぞ」とあるのは話の内容からすればどちらかと言うと不自然で、とつてつけた感じがするのであつて、河内本は、話の内容を合理的に考へて、けすつたのだと思う。一体河内本は合理的であるが、青表紙本の方が微妙な作者の意識を伝えていて原本の文調に近いものを伝えているのではないかと思われる。言われているように、河内本なるものは、鎌倉時代の注釈的説明的なにおいするものであつて、鎌倉の合理化というべく、原文のもつていた文体が変改されている感じがするのである。

以上主として帚木巻の考察で指定の紙幅に達してしまつた。更に空蟬巻、夕顔巻について論述をつづけたのであるが、将来の機会を期したい。

註1、狭衣物語が王朝物語文学の様式的完成を示すものであることについては、かつて広島文理大國語国文学会（昭和二十七年十一月八日）や、平安文学研究発表会（昭和二十八年六月十三日相愛女子大において）で論じたことであるが、「短篇から長篇へ」の王朝物語文学の成長発達の間からも強く説き、近く論をまとめたと思つてゐる。

註2、「源氏物語の研究」第一篇「源氏物語の成立過程に就いて」第四章「卷々の頭尾に就いて」参照

註3、「源語成立攷」「昔物語の構成」（いづれも「源氏物語構想論」所収）参照

註4、「玉篋の遺型」——玉篋の並びの主題とその享受——で論

じたことがある。(広島大学国語国文学会研究発表会昭和二十八年十一月十五日)

註5、この帯木冒頭の文に交野少将物語が出る意味については玉上琢彌先生が「昔物語の構成」に述べていられる。伊勢物語初段との関係についても玉上先生の御教示によつて山本利達氏が「昔物語と源語」(国語国文昭和二十八年一月号)に述べていられる。

註6、中村孝也博士著新国史観卷六荘園成熟史論第六章国司と荘園、同書一七九頁参考

註7、玉上先生「物語音説論序説」(国語国文十九卷三号)参照

註8、「源語成立攷」参照

註9、「人の国」という表現が、自分達の国に対する他人の国、近代で言えば本國に対する植民地であるということは、玉上先生の御教示による。——大阪春日丘高校教諭——